家　　庭

1　教育課程の編成

(1) 基本的な考え方

共通教科としての家庭科においては、「家庭基礎」、「家庭総合」及び「生活デザイン」の３科目から、生徒の多様な能力・適性、興味・関心等に応じて必履修科目として１科目を選択的に履修させることとする。

各学校においては、学校で特定の科目に決めてしまうのではなく、複数の科目を開設して生徒が選択できるようにすることが望ましい。

(2) 特色ある教育課程の編成

普通科における職業科目の履修機会の確保が、キャリア教育の充実を進める上で必要とされている。(「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申)」H23.1.31)

このことを踏まえ、専門教科「家庭」の科目を履修させる場合は、各科目の目標を理解した上で、生徒の実態等に応じて適切に設定する必要がある。なお、履修させることが考えられる科目としては、例えば次のようなものがある。(( )の数字は標準単位数)

「消費生活」(２～４)、「子どもの発達と保育」(２～６)、「子ども文化」(２～４)、「生活と福祉」(２～６)、「リビングデザイン」(２～８)、「ファッション造形基礎」(２～６)、「フードデザイン」(２～８)

2　指導計画の作成と内容の取扱い

(1) 指導計画の作成

ア　「家庭基礎」、「家庭総合」及び「生活デザイン」の各科目に配当する総授業時数のうち、原則として１０分の５以上を実験・実習に配当する。その際、実験・実習には、調査・研究、観察・見学、就業体験、乳幼児や高齢者との触れ合いや交流活動などの学習活動が含まれる。

イ　「家庭基礎」は、原則として、同一年次で２単位を履修させ、実験・実習などの実践的・体験的な学習を通して科目の目標を達成することができるよう配慮し、指導の効果を高めることが必要である。

ウ　「家庭総合」及び「生活デザイン」を複数の年次に分割履修させる場合は、例えば第１学年と第２学年で２単位ずつの分割履修をさせるなど、連続する年次において履修させ、実験・実習などの実践的・体験的な学習を通して科目の目標を達成することができるよう配慮し、内容の関連性や系統性に留意して指導の効果を高めることが必要である。

エ　中学校技術・家庭科、公民科、数学科、理科及び保健体育科などとの関連を図るとともに、教科の目標に即した調和のとれた指導が行われるよう留意する。

(2) 内容の取扱い

ア　生徒には常に各自の生活に目を向けて課題意識をもたせるようにし、実生活への活用を図ることができるように問題解決的な学習の充実に一層努める必要がある。

指導に当たっては、各項目の学習と「ホームプロジェクトと学校家庭クラブ」との関連を図り、学習効果を上げるようにするとともに、計画的、系統的に取り扱うよう、

指導計画に位置付けることが必要である。

イ　言語活動の充実を図る上で、子どもや高齢者など様々な人々と触れ合い、他者とかかわる力を高める活動、衣食住などの生活における様々な事象を言葉や概念などを用いて考察する活動、判断が必要な場面を設けて理由や根拠を論述したり適切な解決方法を探究したりする活動などを充実すること。

ウ　食に関する指導については、家庭科の特質を生かして、食育の充実を図ることが重要である。

エ　生活にかかわる外部の様々な情報を収集して活用することやデータの整理など、指導の各場面において、コンピュータ等の情報機器や情報通信ネットワークなどを積極的に活用し学習の効果を高めるような工夫をすることが必要である。

カ　実験・実習を行うに当たっては、関連する法規等に従い、施設・設備の安全管理に配慮し、学習環境を整備するとともに、火気、用具、材料などの取扱いに注意して事故防止の指導を徹底し、安全と衛生に十分留意するものとする。

(3) 各科目の指導計画

人の一生を時間軸としてとらえ、生活の営みに必要な金銭、生活時間、人間関係などの生活資源や、衣食住、保育、消費などの生活活動にかかわる事柄を空間軸としてとらえ、各ライフステージの課題と関連付けて理解させるよう工夫することが重要である。

ア　「家庭基礎」（２単位）の年間指導計画（例）

学期	月	週数	単元（項目）	指導項目	指導のねらい	予定時数	留意事項
前期	4	3	**オリエンテーション**		・「家庭基礎」の目標、内容を理解させる。	1	(3)はその意義と実施方法を理解させ、(1)～(2)の学習の発展として扱う。
			(3) ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動		・意義と実施方法について理解させる。		
	5	3	**(1) 人の一生と家族・家庭及び福祉**	ア　青年期の自立と家族・家庭 (ｱ) 青年期の自立 (ｲ) 生活と意思決定	・生涯発達の視点で青年期の課題を認識させ、男女が協力して家庭を築くことの重要性を考えさせる。	7	
	6	4		イ　子どもの発達と保育 (ｱ) 子どもの生活と家族・家庭 (ｲ) 子どもの育つ環境	・子どもを生み育てることの意義を考えさせ、子どもの発達のための親や家庭及び地域社会の果たす役割を認識させる。	7	
				ウ　高齢期の生活 (ｱ) 高齢期の特徴と生活 (ｲ) 高齢社会を生きる	・高齢者の自立生活を支えるために家族や地域及び社会の果たす役割について認識させる。	6	
	7	2		エ　共生社会と福祉 (ｱ) 家族・家庭と社会的支援 (ｲ) 共生とコミュニティ	・生活課題を主体的に解決し、よりよい生活を創造するために必要な福祉や社会的支援を理解させる。	3	
			(3) ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動		・ホームプロジェクトについて立案させる。	1	
	8	2	**(2) 生活の自立及び消費と環境**	オ　ライフスタイルと環境 (ｱ) 消費生活と環境とのかかわり (ｲ) 環境負荷の少ない生活への取組	・様々な環境問題が生じていることを理解させ、生活意識やライフスタイルを見直すことができるようにする。	4	(2)の内容は、実験・実習を中心とした指導を行う。
	9	4		エ　消費生活と生涯を見通した経済の計画 (ｱ) 消費者問題と消費者の権利 (ｲ) 生涯の経済計画とリスク管理	・消費生活の現状や課題、消費者の権利と責任について理解させ、適切な意思決定に基づいて行動できるようにする。	6	
			(3) ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動		・成果を発表し、次の課題につなげる。	2	
後期	10	4	**(2) 生活の自立及び消費と環境**	ア　食事と健康 (ｱ) 栄養と食事 (ｲ) 食品と調理	・食生活に必要な基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、生涯を通して健康で安全な食生活を営むことができるようにする。	１６	
	11	4					
	12	3		イ　被服管理と着装 (ｱ) 被服の機能と着装 (ｲ) 被服の管理と計画	・被服管理に必要な知識と技術を習得させ、衣生活を主体的に営むことができるようにする。	7	
	1	1					
	2	3		ウ　住居と住環境 (ｱ) 住居と家族の生活 (ｲ) 安全で環境に配慮した住生活	・住居の機能などの基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、環境に配慮した住生活を営むことができるようにする。	7	
	3	2		カ　生涯の生活設計	・自分の目指すライフスタイルを実現するために、生活を設計できるようにする。	3	
計		35				７０	

イ　「家庭総合」（４単位）を連続する２か年において履修させる年間指導計画（例）

【第１学年】

学期	月	週数	単元（項目）	指導項目	指導のねらい	予定時数	留意事項
前期	4	3	**オリエンテーション**		・「家庭総合」の目標、内容を理解させる。	1	⑹はその意義と実施方法を理解させ、⑴～⑸の学習の発展として扱う。
			⑹ ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動		・意義と実施方法について理解させる。	1	
	5	3	**⑴ 人の一生と家族・家庭**	ア　人の一生と青年期の自立 (ｱ) 人の一生と発達課題 (ｲ) 青年期の課題 (ｳ) 生活の自立を目指す上での意思決定	・生涯発達の視点で各ライフステージの特徴と課題について理解させ、青年期の課題である自立や男女の平等と相互の協力などについて認識させる。	8	
	6	4		イ　家族・家庭と社会 (ｱ) 家庭の機能と家族関係 (ｲ) 家庭生活と社会	・現代の家族の特徴や家庭の機能を理解させ、家族・家庭の意義、家族・家庭と社会とのかかわりについて考えさせる。	9	
	7	2	**⑶ 生活における経済の計画と消費**	ア　生活における経済の計画 (ｱ) 家計と経済 (ｲ) 資金管理とリスク (ｳ) キャッシュレス社会とその課題	・経済社会の大きな変化の中で、主体的な資金管理の在り方やリスク管理の考え方を導入した経済計画の重要性について認識させる。	8	
	8	2					
	9	4		イ　消費行動と意思決定 (ｱ) 消費者の意思決定とその重要性 (ｲ) 生活情報の収集・選択と活用	・消費者としての意思決定の過程と留意すべき事項について理解させ、生活情報を適切に収集・選択し活用できるようにする。	6	
後期	10	4		ウ　消費者の権利と責任 (ｱ) 社会の変化と消費生活 (ｲ) 消費者問題の現状と課題 (ｳ) 消費者の権利と自立支援	・消費者問題の発生の背景とその被害の防止や救済について理解させ、一人一人が消費者としての権利と責任を自覚して行動できようにする。	１０	
	11	4	**⑷ 生活の科学と環境**	イ　衣生活の科学と文化 (ｱ) 人の一生と被服 (ｲ) 衣生活の自立と管理 (ｳ) 衣生活の文化と製作 (ｴ) 衣生活と環境	・各ライフステージの衣生活の特徴や課題と関連付け、衣生活を主体的に管理し、快適な衣生活を営むための知識と技術を習得させ、主体的に衣生活を営むことができるようにする。	１４	
	12	3					
	1	1		ウ　住生活の科学と文化 (ｱ) 人の一生と住居 (ｲ) 住生活の計画と選択 (ｳ) 住生活の文化 (ｴ) 住生活と環境	・住居の機能、住空間の計画、住環境などについて科学的に理解させ、住生活の文化に関心をもたせ、必要な知識と技術を習得して、安全と環境に配慮し、主体的に住生活を営むことができるようにする。	8	
	2	3					
	3	2	**⑸ 生涯の生活設計**	ア　生活資源とその活用	・生活の営みに必要な生活資源を有効に活用することの重要性について認識させる。	5	
計		35				７０	

【第２学年】

学期	月	週数	単元（項目）	指導項目	指導のねらい	予定時数	留意事項
前期	4	3	**⑹ ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動**		・ホームプロジェクトについて立案させる。	1	
	5	3	**⑷ 生活の科学と環境**	ア　食生活の科学と文化 (ｱ) 人の一生と食事 (ｲ) 食生活の自立と調理 (ｳ) 食生活の文化 (ｴ) 食生活と環境	・各ライフステージの食生活の特徴を理解させ、生涯を見通した食生活の管理運営ができるようにする。 ・調理実習を通して食生活の自立に必要な知識と技術を習得させる。	２０	
	6	4					
	7	2		エ　持続可能な社会を目指したライフスタイルの確立 (ｱ) 持続可能な消費 (ｲ) 環境保全に向けたライフスタイルの確立	・経済発展や大量生産・大量消費・大量廃棄の生活により、様々な環境問題が生じていることを理解させ、生活意識やライフスタイルを改め、持続可能な社会を目指すことの重要性を認識させる。	１０	
	8	2					
	9	4					
後期	10	4	**⑵ 子どもや高齢者とのかかわりと福祉**	ア　子どもの発達と保育・福祉 (ｱ) 子どもとかかわる (ｲ) 子どもの発達と生活 (ｳ) 親の役割と子育て支援 (ｴ) 子どもの権利と福祉	・子どもと触れ合う機会をもつことなどにより保育への関心をもたせ、子どもの発達の実際の姿を理解させる。 ・子どもの健やかな発達を支える親の役割などについて認識させる。	１６	
	11	4					
	12	3		イ　高齢者の生活の福祉 (ｱ) 高齢者とかかわる (ｲ) 高齢者の生活と課題 (ｳ) 人間の尊厳とケア (ｴ) 高齢社会の現状と社会福祉	・人の一生を見通して高齢期について理解させ、高齢者の自立生活を支えるために、個人や家族、社会が果たす役割について認識させる。	１２	
	1	1		ウ　共生社会における家庭や地域	・ノーマライゼーションの理念を土台とした社会をつくる重要性を理解させる。	5	
	2	3					
	3	2	**⑸ 生涯の生活設計**	イ　ライフスタイルと生活設計	・将来の生活に向かって目標を立て、展望をもって生活することの重要性を理解させる。	4	
			⑹ ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動		・問題解決能力と実践的態度を育てる。	2	
計		35				７０	

ウ　「生活デザイン」（４単位）を同一学年で履修する指導計画（例）

学期	月	週数	単元（項目）	指導項目	指導のねらい	予定時数	留意事項
前期	4	3	オリエンテーション		・「生活デザイン」の目標、内容を理解させる。	1	(6)はその意義と実施方法を理解させ、(1)～(5)の学習の発展として扱う。
			(6) ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動		・意義と実施方法について理解させる。		
	5	3	(1) 人の一生と家族･家庭及び福祉	ア　青年期の自立と家族・家庭 (ｱ) 青年期の自立 (ｲ) 生活と意思決定	・生涯発達の視点で青年期の課題を認識させ、男女が協力して家庭を築くことの重要性を考えさせる。	7	
				イ　子どもの発達と保育 (ｱ) 子どもの生活と家族・家庭 (ｲ) 子どもの育つ環境	・子どもを生み育てることの意義を考えさせ、子どもの発達のための親や家庭及び地域社会の果たす役割を認識させる。	7	
				ウ　高齢期の生活 (ｱ) 高齢期の特徴と生活 (ｲ) 高齢社会を生きる	・高齢者の自立生活を支えるために家族や地域及び社会の果たす役割について認識させる。	7	
			(6) ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動		・ホームプロジェクトについて立案させる。	2	
	6	4	(2) 消費や環境に配慮したライフスタイルの確立	ア　消費生活と生涯を見通した経済の計画 (ｱ) 消費者問題の現状と課題 (ｲ) 消費者の権利と自立支援 (ｳ) 消費行動と意思決定	・消費者問題について具体的な事例を通して理解させ、消費者として適切な判断ができるようにする。	１３	
	7	2					
	8	2	(3) 食生活の設計と創造	ア　家族の健康と食事 (ｱ) 食事の意義と食生活の課題 (ｲ) 家族の栄養と食事 (ｳ) 家族の食事と献立	・食事の意義や、家族の健康維持のための食事と栄養や調理とのかかわりを理解させ、生涯を通して健康に配慮した家族の食生活を管理できるようにする。	5	
				イ　おいしさの科学と調理 (ｱ) おいしさの要素 (ｲ) 食品の調理とおいしさの科学 (ｳ) 食品の加工とおいしさの科学	・食べ物のおいしさの要素と五感とのかかわりを理解させ、食品の調理とおいしさの科学、加工食品とおいしさの科学に関する知識と技術を取得させる。	１７	
	9	4		ウ　食生活と環境 (ｱ) 食生活の安全と衛生 (ｲ) 環境に配慮した食生活	・食生活の安全と衛生について理解させるとともに、環境に配慮した食生活の在り方について考えさせ、主体的に家族の食生活を営むことができるようにする。	5	
			(1)の選択項目	オ　子どもとの触れ合い カ　高齢者とのコミュニケーション	・地域の子どもや高齢者の生活の中から課題を見いだし、グループで問題解決を図るために計画、立案し、実践をさせる。 ※生徒の興味・関心等に応じて選択する。	6	(1)のオ､カ､(3)～(5)のエについては、生徒の興味・関心等に応じて、適宜項目を選択して履修させる。
			(6) ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動				
後期	10	4	(4) 衣生活の設計と創造	ア　装いの科学と表現 (ｱ) 被服の機能と着心地 (ｲ) 装いと表現	・装いによる自己表現と他者に与える印象について考えさせ、着用目的にあった被服選択や着装を工夫できるようにする。	5	
				イ　被服の構成と製作 (ｱ) 被服の構成と身体 (ｲ) 被服の製作	・和服と洋服の構成上の特徴や被服材料、着装の特徴を理解させるとともに、創造性を生かした被服製作ができるようにする。	１０	
	11	4		ウ　衣生活の管理と環境 (ｱ) 被服の選択 (ｲ) 被服の管理と環境に配慮した衣生活	・被服の入手、洗濯、保管など、衣生活を管理する知識や技術を習得させ、資源の有効利用を考えた被服計画の必要生を理解させる。	5	
	12	3	(5) 住生活の設計と創造	ア　家族の生活と住居 (ｱ) 住居の機能 (ｲ) 家族のライフステージと住居	・住居の機能と管理、家族のライフステージなどに応じた住空間について理解させ、安全で健康的な住生活について考えさせる。	5	
				イ　快適さの科学と住空間の設計 (ｱ) 快適な住空間の設計 (ｲ) インテリア計画	・インテリア、園芸などに関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、平面計画やインテリア計画ができるようにする。	１０	
				ウ　住居と住環境 (ｱ) 住環境と地域 (ｲ) 環境に配慮した住生活	・住居を取り巻くコミュニティとのかかわりについて考えさせ、耐久性や地球環境に配慮した住居について関心をもたせる。	5	
	1 2	1 3	(1) 人の一生と家族･家庭及び福祉	エ　共生社会と福祉 (ｱ) 家族・家庭と社会的支援 (ｲ) 共生とコミュニティ	・人の一生を見通して生活課題を主体的に解決し、よりよい生活を創造するために必要な福祉や社会的支援を理解させる。	6	
			(2) 消費や環境に配慮したライフスタイルの確立	イ　ライフスタイルと環境 (ｱ) 消費生活と環境とのかかわり (ｲ) 環境負荷の少ない生活への取組	・様々な環境問題が生じていることを理解させ、生活意識やライフスタイルを見直すことができるようにする。	8	
				ア　消費生活と生涯を見通した経済の計画 (ｴ) 生涯の経済計画とリスク管理 ウ　生涯の生活設計	・生活上のリスクの回避や分散など個人の資金管理の基本について理解させ、主体的に生活を設計できるようにする。	6	
	3	2	(3)～(5) 選択項目	エ　食生活のデザインと実践 エ　衣生活のデザインと実践 エ　住生活のデザインと実践	・衣食住における歴史や文化などについて理解させ、文化を継承し衣食住生活を創造的に実践できるようにする。	１０	
計		35				１４０	

3　言語活動を充実する学習指導の実践例

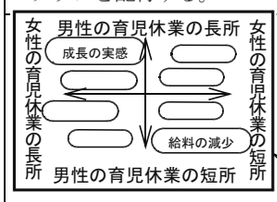
生徒の思考力・判断力・表現力等をはぐくむ観点から、レポートの作成や論述といった知識・技術を活用する場面を設定するなど、言語の能力を高める学習活動が重視されている。家庭科において、言語活動の充実を図る上で求められる学習活動及びその実践例を以下に示す。

(1) 知的活動に関する言語活動を取り入れた学習活動及び「家庭総合」の実践事例

知的活動に関することとして、合理的な判断力や創造的思考力、問題解決能力の育成を図るため、衣食住などの生活における様々な事象や科学性を説明する活動や判断が必要な場面を設けて理由や根拠を論述したり、正解が一つに絞れない課題を考える際、最適な解決方法を探究したりする活動を重視する。

(2) 子どもや高齢者とのかかわりと福祉　ア　子どもの発達と保育・福祉　(7) 子どもとかかわる（1/16時間）

本時の目標	「男性の育児休業」について、その現状を踏まえ、長所と短所を考え、自分や自分の配偶者の立場になって取得する、しないの意思を根拠をもって論述することができる。	指導の工夫	正解が１つに絞れない課題(※１)について、一人一人が自分で判断するために、他者の考えを参考にし、根拠をもって自分の考えを論述させる。

	指導内容	学習活動	指導上の留意点	評価規準等
導入	・本時の学習目標を確認する。 ・「出産・育児休業」について考えさせる。 ・「男性の育児休業」について現状を理解させる。	・「出産・育児休暇」について、自分の親や小・中学校時代の先生など身近な人の取得状況を話し合う。 ・「男性の育児休業取得」の現状を理解する。	・話し合いの中で、男性の育児休業取得者の話題が出たら、全体で取り上げる。 ・「男性の育児休業取得率」のグラフを配付する。 仕事と生活の調査レポート2010（H22年9月）の「男性の育児休業所得率」などを参考にする。	
展開	・男性の育児休業の取得率が低い理由を考えさせる。 ・グループで考えを交流させ、他者の意見を参考にし、自分の考えを導きださせる。	・「男性の育児休業」の長所と短所を考えカードに記入する。(個人) ・「女性の育児休業」の長所と短所を考えカードに記入する。(個人) 諸外国と比較ができる資料を準備するとよい。 ・それぞれの意見をグループで「概念化シート」に整理する。	 概念化シート（※2）を用いて、考えを整理する。	【思考・判断・表現】 「育児休業」について、長所と短所を考えることができる。 〈評価方法〉 グループ協議の観察
まとめ	・「男性の育児休業」について自分の考えを深めさせる。 ・親の役割と子どもの権利の学習を進め、最後の時間に再度「男性の育児休業」を検討することを伝える。	・「男性の育児休業」について自分または、自分の配偶者が取得する、しないについて意思を明らかにし、その理由を明確にし、ワークシートに記入する。	・交流から他者の意見を参考に、自分の意思とその理由を記入するよう指導する。 1時間目と最後の時間の記入が比較できるワークシートを作成する。	【関心・意欲・態度】 「男性の育児休業」から親の役割について考えようとしている。 〈評価方法〉 ワークシートの記述

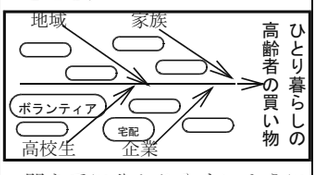
※１　正解が１つに絞れない課題の例
　「ワーク・ライフ・バランス」、「老老介護」、「有償ボランティア活動」、「食料自給率」、「資源・エネルギー問題」など
※２　概念化シートは、縦軸と横軸の座標軸を設定し、二対になる要素について４象限で考えを整理していく。

(2) 他者とのコミュニケーションに関する言語活動を取り入れた学習活動及び「生活デザイン」の実践事例

他者とのコミュニケーションに関することとして、人が他者との会話を通して考えを明確にし、自己を表現し、他者を理解し、他者と意見を共有し、互いの考えを深めることを通して協同的な関係を築くような活動を重視する。

(1) 人の一生と家族・家庭及び福祉　カ　高齢者とのコミュニケーション　（3/6時間）

本時の目標	デイサービス訪問による高齢者との交流活動を基に、高齢者を取り巻く社会の課題について理解し、高齢者を支援する立場からその具体的な解決策を考えることができる。	指導の工夫	高齢者との交流活動のリポートを個人的な感想で終わらせず、グループで意見を共有し、高齢者を取り巻く課題について互いに考えを深めさせる。

	指導内容	学習活動	指導上の留意点	評価規準等
導入	・前時の高齢者交流実習から、各自が気付いた課題をカードに記入させる。	・前時の高齢者交流活動のリポートから、自分が感じた高齢者に関する課題や問題点等をそれぞれカードに記入する。(個人)	・高齢者との交流活動を振りかえらせる。 ・必要分のカードを用意する。	
展開	・各自の課題を、理由とともにグループで発表させる。 ・班内で取り上げる課題を決定させ、高齢者を支援する立場から、具体的な解決策を様々な角度から考えさせる。 ・各グループのまとめを発表させ、他の班の発表も各自で記録させる。	・記入したカードをグループで提示し、「※フィッシュボーン法」によって課題を整理する。 （グループ） ・提示された中から解決すべき課題を１つを選ぶ。 ・課題を解決する視点として、本人、家族、地域などを考える。 ・各視点について、具体的な解決策を考え、記入する。 ・各グループのまとめを発表し、各自で他のグループの発表を記録する。	・各カードから、自分が気付かなかった課題や気づきを認識させる。  ・聞き手に分かりやすいように発表させる。	【思考・判断・表現】 自分の考えを他者へ伝え、グループで意見を共有し、高齢者を取り巻く課題について互いに考えを深め、発表することができる。 〈評価方法〉 行動観察、発言、ワークシートの記述
まとめ	・本時のまとめと次時の予告をする。	・本時の学習を振り返り、高齢者を取り巻く課題について認識する。	・本時の学習目標に対する取組状況を評価する。	

※　フィッシュボーン法は、特殊要因図ともいい、要因（問題の原因）から特性（問題の結果）に至るまでを図に示すことで、問題とその要因との関係を究明し、よりよい方策を探索しようとするものである。出された要因を中骨、小骨のどこに位置付けるかを検討し、似た内容をまとめ、簡潔に言い表したタイトルを中骨の先に記入し、図から問題の要因を洗い出していく。

(3) 感性や情緒に関する言語活動を取り入れた学習活動及び「家庭基礎」の実践事例

感性や情緒に関することとして、衣食住などの生活における様々な事象やものづくりなどに関する実践的・体験的な活動を一層重視し、その過程で様々な語彙の意味を実感を伴って理解させるような学習を重視する。

(2) 生活の自立及び消費と環境　ア　食事と健康　(ｲ) 食品と調理　(10/16時間)

本時の目標	２回目の調理実習を通して学んだ知識や技術を「調理実習の記録」に記述する中で科学的に理解し、実際の食生活の中で実践できる能力を身に付ける。	指導の工夫	調理実習による体験的学習のまとめに必要な「考察の方法」について理解し、文章にて表現させ、今後の体験的学習の考察に活用する。

	指導内容	学習活動	指導上の留意点	評価規準等
導入	・本時の学習内容を確認させる。	・本時の学習内容を知り、記録用紙や写真から、前回の調理実習の内容を思い出す。	・実習中の様子や出来上がりの状態を写真に残しておく。	
展開	・「実習のまとめ・考察」の欄をグループ内で読み合い、実習を振り返らせる。 ・グループの記述を基に、その結果や感想に至った要因や背景について考えさせる。 ・考察の方法を身に付けさせる。 ・「実習のまとめ・考察」の欄を再考し、新たに文章でまとめさせる。	・「実習のまとめ・考察」の欄をグループ内で読み合い、他者の記述内容から調理実習を振り返る。 ・各自が記述した「上手にできた点」「反省点」「気付いた点」などについて、その理由、対策、改善方法、次回の実習への活用方等を具体的に考え、班で箇条書きにまとめる。 ・自分の感性や技術、経験を大切にしながら、班のまとめを参考に、「実習のまとめ・考察」の欄を再度記述し直す。	・自分が記述しなかった観点や考察の仕方に注目させる ・グループで活用するワークシートを用意する。 調理実習のまとめ・考察（グループ） 項目：ハンバーグが生焼けだった。 理由：火加減の調整に問題 反省：竹串をさし肉汁を確認する 改善方法：担当者を決め、火加減や調理方法をはじめに全員で確認する。 ・「疑問点」や「課題点」等もグループで深める。 ・自分の言葉での表現を重視する。（班全員が同じ文章と内容で記述しない） ・前回の記述内容は残す。	【知識・理解】 調理実習から得た「気付き」の背景を分析し、調理を科学的に理解している。 〈評価方法〉 行動観察、発言、ワークシートの記述 【思考・判断・表現】 「実習のまとめ・考察」の欄を再考し、感想のみの記述から、調理を科学的に分析し、結果と反省、改善方法及び実生活への活用方法を考え、記述することができる。 〈評価方法〉 「実習のまとめ・考察」欄の記述
まとめ	・本時のまとめと次時の予告をする。	・本時の学習を振り返り、次回以降の「調理実習の記録」や「体験学習記録」の記述方法に生かす。		

Topic

「※消費者市民社会」を目指す消費者教育の充実

※消費者市民社会とは、個人が、消費者・生活者としての役割において、社会問題、多様性、世界情勢、将来世代の状況を考慮することによって、社会の発展と改善に積極的に参加する社会を意味しています。

消費者教育の４つの主要分野と少年期（中学・高校生）における目標

安全	○日用の商品のマークや品質表示などの意味を理解して、集めた情報の中から、安全な商品を選び適切な取り扱いができる。 ○日用の商品による事故・危害に応じた相談機関を利用できる。 ○商品の安全性、消費者の安全を確保するための取組を知り、法律や制度に関心をもつことができる。	契約・取引	○日用の商品を買うときに、必要性や価格・品質などを比較検討して選択できる。 ○家計や将来の生活を考えて、買い物の購入計画を立てたり、貯金などを有効に活用できる。 ○契約の意味と基本的なルールや仕組み（契約当事者としての権利と義務等）を理解し、適切な消費行動ができる。 ○契約・取引のトラブルにあったときに、消費者のための法律・制度を活用したり、身近な人や相談機関に相談することができる。
情報	○情報通信の利便性を理解し、情報の収集・発信などの際に情報通信を適切に活用できる。 ○情報の収集・発信の際に起こる問題や解決方法などを理解して、個人情報を適切に管理し、自他の権利や利益に配慮して情報通信を適切に活用できる。 ○作品や商品には知的財産権があり、法律で保護されていることを理解し、知的財産権に配慮して他人の創作物などを利用できる。	環境	○日用の商品のマークや品質表示などの意味を理解し、環境に配慮した商品を選ぶことができる。 ○消費生活が環境に及ぼす影響を理解し、日用の商品の使用・廃棄について適切な対処ができる。 ○国内や国際的・地球規模の環境問題と消費生活との関連に関心をもち、それらに関わる環境保全活動に参加・協力できる。

消費者教育の体系シート～ライフステージに応じた領域別目標～（「消費者教育体系化のための調査研究」平成17年）

【参考】消費者教育ポータルサイト（http://www.caa.go.jp/kportal/index.php）
消費者庁ホームページ（http://www.caa.go.jp/）
教員・講師のための消費者教育ティーチングガイド（財団法人消費者教育支援センター平成20年３月）
消費者教育リーフレット（北海道教育委員会平成23年８月）
（http://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/hk/kki/syouhisyakyouiku.htm）